



夜間大学生の頃

～その2～

土橋 重治

前号よりの続きく

仕事と学業の両立

昭和三十三年(1958)五月二十一日の日記に「五時五分前に大学へ行こうと準備をしていると、東和歌山駅へ串本通信局からの原稿を受け取りに行っていたYさん(四月からアルバイトで入局してくれていた)に『はい、お土産』と未現像フィルムを渡された。

それを現像していると『向陽高校が火事だ』と一報が入った。すぐにカメラを持って現場に走った。六教室が全焼した。あと十分到着が遅れていたらよい写真は撮れていなかった。一時限の国文学は欠席、二時限目の法学の教室に入った。八時を過ぎていた。

学業に力を入れようと思っても今日のようなことがある。それでも仕事だから仕方ない」とあ

る。

県立高校の六教室全焼、しかも放課後の部活動など行われる時間帯の火事となると大きなニュースである。本紙(全国版)へ送稿する記事であろうと思う。

この日を想像すれば、写真を撮って帰り、その処理をすませて電送してから大学へ急いだのだろう。日記から年月日が特定できたので「紙面を見てみたい」と思い立ち、県立図書館へ足を運んだ。

調査相談カウンターで当日の朝日新聞の閲覧の手続きをした。自分の撮った写真が本紙に掲載されているのか、地方版ではどんな紙面の扱いになっているのか、六十年ぶりの対面に胸をときめかせて待った。

台車に乗せて運ばれてきた。丈夫な黒い表紙で製本された一ヵ月分の新聞は薄茶色に変色してい

た。破損しないように慎重に頁を繰った。その日の一面が出た。

見出しに「自民長期政権の足固め」「岸色強化に努む」となんとこの日の新聞は総選挙の開票結果関連の記事で各面とも埋め尽くされていた。

案の定、和歌山版のトップ記事の見出しは「新選良相次決まる」「一区田中、坊、山口氏、二区早川、辻原氏」とあって選挙一色の紙面であった。

向陽高校火事の記事は二段の見出しで「焼け跡にマッチのジク?」「向陽高校の火事、現場検証で原因追及」として小さく報じられていた。写真は(ボツ)となっていた。当日串本から送られてきた記事も見当たらなかった。

結局この日、自分にとつてかけがえのない大学の授業も欠講して働いた三時間の成果は全く報われ